
二度告白する勇気

八神智和

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

一度告白する勇気

【Zコード】

Z27380

【作者名】

八神智和

【あらすじ】

残り三年の命の少女と、その少女を先輩に持つ、一人の恋の物語

「好きです」

少年のそのセリフに、少女は言葉を詰まらせた。

学校の屋上で、勢いのよい風が吹く。髪を揺らすこの風に心地よい何かを感じていた彼らはそれぞれの思いを胸に秘め、無言のまま数分の時間を過ごした。

私も、と言えたらどれだけよかつただろう。

何も考えずに、ただ純粹に、己の心だけを頼りにして、思いの内をさらけ出せれば、どれだけ楽だつただろう。

けれど。

だけれど。

「ごめん、この前も言つたけど私は人と付き合えないの。例え、私がアナタを好きだつたとしても私はアナタと付き合えない」
だから、ごめん、と少女は頭を下げて少年にそう言つた。
好きだと言いたかつた。

大好きだと言いたかつた。

嬉しいと屋上で叫びたかつた。

抱きついて、力強く抱きしめて欲しかつた。

初恋とは言わない。

長くから思い続けてきた想いとは言わない。

だけど、大切だつた。

「それに……私はつ

大切だからこそ、少女は、自分の気持ちを押し殺し少年を拒絶する。

「キミのことなんて……つ

泣きそうになるのを堪え。

「友達ならともかくッ

気丈な、いつもの先輩面をして。

「恋人だなんて……」

嘘をつく。

「だから……」

一緒に居られるだけで少女は幸せだったから。

「私には、」

この言葉で、もう一緒にいられることはできなくなってしまったからで、もしけないけれど。

「無理っ！だから……もう！」

少女が幸せを諦めるだけで、少年の為になるといつになら。

「……諦めてよ」

少女は喜んで、自分の幸せを捨てようと思えた。

「…………」

その言葉を受けて、少年は顔を伏せた。

少女は、それを見ただけで泣きそうになる。

「ごめんなさい、と。言いたくなる。

自分の好きな少年を、自分の都合で悲しませてしまつのはとてもつもなく苦しいことなのだと改めて自覚した。

だからもう、関わるのはやめよう。

「キミが告白して私が断つた時に『では、友達ってことで手を打ちましょっ』って言ったよね？『ずっと友達のままで』って言ったよね？だから、もうダメ。私はキミを許さない」

本当は、その『友達』っていう言葉がとても嬉しくて。

まだ、少年と繋がりがあることがこの上なく幸せで。

帰り道で鼻歌してしまつくらいに舞い上がつたけれど。

少女は、その繋がりを自ら絶ち切ることを選んだ。

（いや、違うや。これも一つの幸せだよね）

少年の為に、好きな人の為に何かできると並ぶ事は、それだけで幸せなのかもしれない。

これは誇るべきことだ。好きな人のために、自分はやれることをやつて居るのだから。

誰が何と言おうとも、このことは絶対に否定せない。自分は幸せである、と少女は胸を張つて言おう。

そう思つたのに。

そう思いたいのに、少女の中に溢れる感情はどれも悲しみしかありはしなかつた。

（この後に及んで、私は何を望んでるんだろうなあ……）

そう思いながら少女は少年に背を向けて、校内へと続く階段へと足を向けた。

顔を見たくなくなつたわけではない。

これ以上、少年の顔を見ていると自分が泣きそうにだつたから。このままだと顔を見なくても泣いてしまいそうだったから。

そうして、少女の恋は終わる。

悲しみこそあるが、後悔はない。

これで良い。これで良いのだ。

少女も少年も悲しむ結果になつてしまつたけれど、二人が付き合うとそれ以上の悲しみがある。

それだけは絶対に嫌だつた。そんなことになるべからいなら、死んだ方がマシだつた。

だから、この恋はここで終わり。

元々、この恋は成就するものとは思つていなかつたし、近くに居るだけで充分だつたのだ。

一緒に居るだけで良い、といつ願いさえも神様は許してはくれなかつたけれど、少年の幸せを願つぐらこの我儘ぐらになら神様も聞いてくれると思うから。

だから。

（さよなら……）

好きな人と一緒に居られた短い時間。

これで終わり。もう顔を合わせることもないだろう。

だからこそ、さよなら。

「さよなら……私の

」

私の、最高に好きな人。

けれど、少女の願いに反し、少年の抵抗はまだ続く。

「もう、嘘なんてつかなくていいじゃないですか」

少年の言葉に、少女の肩がビクリと揺れた。

思わず立ち止り、肩越しに後ろを見る。

「な、ん……の話かな？ 私は……ぜ、全然嘘なんてついてないよ」

我ながら引きつった笑みだと思う。

そう感じられるほどに少女は今、焦っていた。

「わ、けわからないよ。私が、いつたいどんな……嘘をついたって

」

「知ってるんですよ。先輩の病気の話」

「つ！？？」

一気に少女の顔が青ざめた。悪戯を教師に見つかって、みたいな青ざめ方ではない。

世界の絶望を知つてしまつたかのようだ、世界に絶望してしまつたかのような、そんな表情だった。

「いつたい……誰に聞いたの」

ダメだ。これはダメだ。

「アナタを想う人です。世界で一番アナタを愛している、とその人は言つていましたよ

ダメなんだよ。キミはこれ以上私に近づいたらいけないんだ。

「そんな人……私は知らない」

「知つているはずです。アナタの一番そばに居てくれた、アナタにとつても最愛の人。知らないわけがないんですよ」

そんな人知らない。キミ以外に私を想つてくれた人なんて

想像もつかない。

「わ、わからないよ。私の病気のことを知っている人はこの学校に先生くらいしかいないし……っ！」

しかし、本能的な部分で少女は理解していたのかもしれない。

少女のことを一番気にかけ、一番愛している人物を。

少女のためなら、命を差し出すとまで明言する人物を。

少女にとつてとても大切な人物のことを。

『母さんは、アナタのことを世界で一番愛しているわ』

「つ……」「……」

涙が出そうになつた。

声が出そうになつた。

弱音を吐きそうになつた。

力が抜けそうになつた。

それら全部を抑えつけ、少女は誰にも本当の顔を見せない『仮面』

をつける。

本音を隠す『仮面』をつける。

『キミには関係ないでしょ』

決めたのだ。

もうこの少年のことは諦めると。

三年間だけしか生きられない私が、少年を幸せになど出来るはずがない。

今更、少年の好意に甘えてその少年を不幸にすることは、少女にとつてやつてはいけないことだ。

絶対に、やつてはいけないことなのだ。

「そうだよ、私は確かにあと三年で死ぬ。色々な病院を回つたけど『もうダメだ』『助からない』って言葉以外聞いたことない」

けどね、と少女は言葉を区切る。

「それが何だつていうの？』『キミには』何の関係もない。私の事

情に勝手に首を突っ込まないで

拒絶の言葉はどれほどの辛さだらうか。

自分の思い描く『展開』を自ら破壊するにせば、どれほどの辛さだらうか。

か。

少年を想つがために、今この瞬間の少年の幸せを壊すことがどれほどの辛さなのだろうか。

それらを踏まえて。

ふざけるな、と少年は奥歯を噛みしめる。

「関係ならあります

「え……」

直後。

少女は今この瞬間、少年が何をしているかを理解するのに数秒の時間を要した。

身体が痛い。

腰に回された腕がぎゅうと身体を抱きしめる。

「は、離して。いきなり抱きついてくるなんて何考えてるのっ！」

「

「僕は、頼まれたんです」

急なことに身体が追いつかない。好きな人に抱きつかれる、なんていふ予想外の出来事に少女は身をよじるような小さな抵抗しかできなかつた。

「アナタのことを『ようしきお願いします』って、僕は頼まれたんですよ……」

「は、離して……」

「もういいじゃないですか！ アナタだけが辛い思いをしなくても、
アナタだけが背負う必要はないんですよー！」

「離して」

「いい加減、自分に嘘をつくのはやめてくださいよ…！」

「嘘うそ…」

「ドン！」と少年の胸を手で押し、少女は離れた。胸の前に手をあて、赤面する頬のままで、少女は走り去る。

「私には

「「いやいや細かいことは聞いてない!! 僕が好きだと呟いてるんだ!!!!!!」

「ピカリ、と自分の『仮面』にヒビが入ったような気がした。
「もつ一度言こます」

七
め
て

僕はアナタのことが好きです」
もうやめて。

三一

「あと二年で死のうが、どうであろうがそれこそ関係ありません。だから、もう一度聞きます」

これ以上、私にとつての幸せを願わないで！！

あなたが
あなた自身が

”僕のことを好き”だと思っているのか、
僕のことを嫌い”だと思っているのか

「答えてください」

やう言つてこちから手を差し伸べる少年を前にして少女は数歩後ろに下がつた。

「ここで誓つべきことは『嫌い』といつ言葉だ。

少年のことを真に考えるのなら、自分の本音を誓つ事は絶対にい
けないことなのだから。

拒絶した。『仮面』をかぶれ。本当に少年のことを想つのならば、
血の身を引け！！

そう思つのに。

そうしないと眞が幸せになれないのに。

”少女にはどうしても、その少年の差しのべられた手を振りほど
くことは出来なかつたのである。

できるわけがなかつた。理由なんてわからなかつた。こんなにも
感情を素直にぶつけられたのは初めてだつた。こんなにも自分が幸
せだと思えたのは初めてだつた。

だつて、こんなにも身勝手な自分を神様は見捨てはしなかつたか
ら。

これを幸せと言わずになんと言へ。

『仮面』が 壊れる。

「ふ……え」

少女の『絶対に少年の前では泣かない』と誓い、封印していたは
ずの涙腺に熱く込み上げるものを感じた。

頬に伝わるのは、いつもの冷たく嫌なものでなく、温かく幸せな
ものだつた。

そして

『仮面』の奥から溢れる涙が、『仮面』を形作るもの洗い流
した。

「ふつええええええええええええん！……！」

どん、と。

少女のタックルにも似た一撃に、少年は少しだけ苦笑する。

少女の背中に手を回し、お互いを強く抱きしめた。

「わ、わだ、じ……ざん、ね、ん、ごにじん、じゅうん、だよ？」

それでもい、い、の？ と、自分の胸で泣く愛しの少女は先輩と

は思えないほどに小さく、そして儚げなものだつた。

その少女を力強く抱きしめ、少年は心の内にある本心を包み隠さず、打ち明ける。

「だからなんです。その三年間、他の人より幸せになればすむ話じやないですか」

いつまでも他人の幸せを願つた少女は、ついに自分の幸せを手に入れ。

いつまでもその少女の幸せを願つた少年は、ついにその少女の幸せを掴む。

どちらかが欠けていてはダメだつた。二人揃つてこそ、一人の幸せを手に入れた。

そして少年は言つ。　　誰かを想うために自分を犠牲にしてもいいなんてことはないのだと。

そして少女が言つ。　　私はアナタのことが心の底から前から好きだつたと。

そして二人は言つ。　　ありがとう。

三年後、誰をも驚かせるニュースが世界中を飛び回つていた。絶対に治らない不治の病と呼ばれた病気の治療が世界で初めて成功したのだ。

治療したのは医者になつて間もない一人の青年。そして、その治療対象である人物はその男の妻だつた。

一度だけニュースのインタビューに答えてくれたこの夫妻は口を揃えてこう言つたらしい。

諦めなければ、絶対に素晴らしい未来がある

F
I
N

(後書き)

後書きですね

今回の小説はある意味で書いていて楽しい小説でしたね

今回の『まったくもつて恥ずかしい普通の短編恋愛小説』を書くにあたつて一つの課題をつくつてみたんですよ

この頃、自己犠牲で幸せになれるといったことをよく耳にするので

ちょっと、反論したくなりまして

だってせつじやないと嫌じやないですか

誰かの幸せのために、他の誰かが不幸になるってのは嫌じやないですか

そりや、好きな人が他の人を好きになつていたら諦めるのが筋ですよ

好かれるように努力するのもいたつてアリです

しかし、両想いなのに、何かしらの理由で手を引くつてのはダメな気がするんですよ

あと、話が飛躍しますが、誰かが傷つくなら自分が傷つく

なんて自己犠牲が私は大嫌いです

でも、やつぱり血口犠牲ってやつを私はやつちやうとですね

だから、私は自分のことも大嫌いなんだと思いません

自分がやつての程度のことを『血口犠牲』だと叫んでいたのも

嫌いなだけにやつてしまつ自分のことも

やはり、大嫌いなんだと思います

そんなのがいやだから、この小説だけは皆が笑えるハッピーエンドを書きたかったんです

だから、今回の課題は『誰も傷つかず、誰も泣かない、誰もが認めるハッピーハンド』

しかし、『Hンデ』とこつからには話の過程が必要となつてくるわけですが

今回はその過程をすべて排除してみました

書くのが面倒だつたつてのも理由の一つですがね

ところが、過程どいろか頭部すらありませんからね

これじゃ感情移入どころか、キャラの境遇までわからなくなるので、とにかくキャラの今の境遇をわかるような描写をちりばめてみました

読み進めていくことに、そのキャラの行動の理由がわかるわけです

といつても、今回の主人公は一人の『少女』でしたが
少年の方は、最初からやることは決まってましたしね
多分、今回削除した『過程』が素晴らしいものが、世で売れている
ものになるのでしょう

過程が最高であればあるほど、最後のエンディングで涙を流しやす
くなりますから

だから、今回の一回終了短編で恋愛ものを選んだのはミステイクだ
と言つても過言ではないでしょつ

だつて、必要な過程がないんですから

泣けるものの泣けませんよ（笑）

最後に

今回の小説の裏の主人公は『少女の母』です

おそらく、『過程』を書いているのなら、母の描[跡]こそが、一番泣
けた部分かもしれませんね

あえて、色々とわからないことを混ぜることで、『過程』に何があ
つたかを不明瞭にし、想像を膨らませられるようにしてみたのも、
成功したのではないかと自負しております

でも、じつこのまま書いて楽しめです

自分が『最高』だと思えるストーリーを、誰かに提示する「じつねー」種の訴えでもありますから

自分の書いているキャラに憧れることだって、多く俺にはありますからね

では、じつへんで後書きは終了

言いたことは言いましたので、あとは思い残すことにはあつません
じつもで読んでくださった方、ありがとうございました

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2738o/>

二度告白する勇気

2010年10月12日01時55分発行